



視察が終わり全員で記念撮影

## 5) フランス・パリ・デファンス再開発地区視察（10月22日午後）

### 《調査事項》

#### ●都市過密緩和のための副都心の形成と都市デザイン

デファンス地区は、中世の時代パリを守るためパリ市郊外にトリデを築いたことから名付けられたとのことだが、現在はフランス国家を守る役割を果たしているのではないかと思えた。古都パリではその景観を守るため、近代的な高層ビルの建設が禁じられており、企業は昔からの建物の中で企業活動を行っている。しかし企業のIT化が進めば進む程、古いビルでは対応しきれなくなることから、トリデの役割を終えたデファンス地区に近代的な高層ビルを建築し、そこで業務を行うようになった。当初はビル入居企業は少なかったらしいが、今では巨大ビルが乱立し、企業活動の中心として脚光を浴びるようになった。



凱旋門を模した建物



デファンス地区からパリ凱旋門を見る



## 6) フランス・マラコフ市視察（10月23日14:30~17:00）

### 《調査事項》

- 電気自動車・プラグインハイブリッド車の導入促進による低炭素なまちづくり
- 地方自治体による充電設備等インフラ整備の概要と民間との連携

マラコフ市では市事務総長（市長に当る）Michel CIBOTさんと、オートリブ協会副会長をつとめる市議会議員Pierre AVRILさんの出席のもとで視察研修を行った。AVRILさんは議員であり、非常勤の委員として道路政策、交通政策全般について担当しているとの説明であった。

私はAVRILさんの説明を聞くまで、調査項目にあるようなものが実際に運用されているものと思っていたし、電気自動車は私有物として個人が所有しているものと考えていた。しかし、オートリブ協会は発足から3週間しか経てなく、車の購入も今からとのことだったので、導入に至る背景やオートリブの考え方を中心に報告を行う。



説明する AVRIL 氏(右:中央が市長)



説明を聞く調査視察団

### 【導入に至った背景について】

パリでは2年前から交通渋滞の解消策として市営貸し出し自転車・ヴェリーブ（ヴェロ＝「自転車の話し言葉」とリーブ＝「自由」を合成した言葉でパリ市の貸し出し自転車の愛称）が誕生し、成功を収めている。この成功の結果、パリ市は周辺自治体30都市をヴェリーブの中に入れ、自転車の利用範囲（距離）を広げている。

この成功を受け、環境問題への関心も高まる中、パリ市は新たに貸し出し電気自動車（オートリブ）の導入を行うこととなり、パリ市プラス26の自治体が参加し、オートリブ協会を立ち上げた。

貸し出し電気自動車導入のもう一つの背景は、車の使い方が変わってきていることにある。公共交通の充実で自家用車は日頃は使わず時々使うため、車を持つことは大きな



ムダ、という考え方が広がっていることだ。AVRILさんは貸し出し電気自動車のことを「運転手のいないタクシーと考えてもらえばいい」と言い、「マイカーの時代からパブリックカーという時代がくる」、「ケーススタディで45000台位パリ市内で車が減るだろう」とも言った。そしてオートリブ政策は「万人が使える」「ムダをなくす」「地球環境保全」という大きな軸を持っている、と強調した。



視察終了後お礼の握手

いいことづくめのオートリブ政策だが解決しなければならない課題は多いし、本当にうまくいくのだろうか、との思いが強く残った。そうした雰囲気を感じてかAVRILさんは最後にこう言った。「イメージが実現するのは10年後だと思うが、いま取り組まなければ10年先はない」。こうした思いをもって先人は現代を築いてきたのだろう。オートリブ政策の成功を心から願いたい。

話は変わるが、視察団調査に同席したMichel CIBOT市事務総長が会議終了後に私のところに親しく話しかけてこられ、「今年8月長崎市で開催された世界平和市長会議に私も出席した。田上市長にもぜひよろしくお伝えいただきたい」とのことだった。団長として会議の冒頭、視察受入れの御礼と視察目的を伝えるためあいさつを行った時、長崎市議と自己紹介したことから、最後に声をかけていただいたもので、長崎市の平和への取り組みが世界に広がっていることを改めて思った。

## 7) おわりに

今回の視察はメンバーにも恵まれ、多くのことを学ぶことができたが、旅行期間中に見聞したことを通じてドイツやフランスの国民性の一端を垣間見た気がするので触れておきたい。

ドイツを訪問した初日に通訳から聞いた出勤途中の出来事である。その日は大変寒く朝は霜が降りていたが、通訳が乗った列車の車輪にも氷がつき、列車はスリップのため1両目がホームをはみ出してしまったという。そのため運転手は車両のドアを開けずそのまま次の駅へと向かい、車内放送で「1両目の車両がホームを通過したためこの駅では降りられません。この駅に降りる人は次の駅で降りて車両を乗り換え戻ってください」と説明があ



ったという。そしてこの説明に対して誰も何も言わなかったという。日本では絶対にありえないことだし、大騒動になっていたことだろう。

また、ダルムシュタットでのショッピングセンター視察の折、つい最近郊外に大型ショッピングセンターができ、駐車場に入るのに30分待ちの盛況を呈していることに係わり、ルイーゼンやカレーショッピングセンターは顧客が流れる不安はないのかとの質問に、売り場責任者は「ものめずらしさで30分待ちの状況になっているのだと思う。そのうち30分も待つようなところにはいかなくなる」と悠然としていた。自信の表れだろうが、日本の場合売り場責任者は「こうした手を打っている」と危機感をあらわに説明することだろう。

フランス・マラコフ市での視察で、オートリブの副会長は「軌道に乗るのに10年かかると思うが、今取り組まなければ10年先はない」といった。彼は議員で、次の選挙では逆に足かせになるかもしれないオートリブに全力で取り組んでいる姿に、個人よりも公共の利益を優先させるフランス人気質の一端を見た気がする。